

袋井市指定文化財
◀浅羽佐喜太郎公纪念碑
1998年(平成10)7月31日指定高さ2.27m、幅0.87m

袋井市指定文化財

浅羽佐喜太郎公碑 建立100年

特別展

▼1918年(大正7)春 完成式典

静岡県磐田郡東浅羽村梅山 常林寺
製作費約200円、工期 一句(約10日) 前列右から2番目が潘佩珠



2018年 袋井市歴史資料館

「浅羽佐喜太郎公纪念碑」

碑文原文・読み下し文

碑文原文

予等以國難奔扶桑。公哀其志拯於困。弗冀所
酬。蓋古之奇俠也。嗚呼。今竟無公矣。蒼茫天海
俯仰誰訴。爰泐所感于石。銘曰、
豪空古今。義亘中外。公施以天。我受以海。
我志未成。公不我待。悠悠此心。其億萬載。
戊午春 越南光復会同人謹誌 大杉旭嶺鐫

表

裏

賛成員

大正七年三月

岡本 三治郎

岡本 節太郎

浅羽 義雄

碑文読み下し【表のみ】

予等國難を以て扶桑に奔る。公其の志を哀れみ困を拯ふ。酬ゆる所を冀はず。
蓋し古の奇俠なり。嗚呼。今竟に公は無し。蒼茫たる天海に俯仰し誰か訴えん。
爰に感ず所を石に泐す。銘に曰く、

豪たるは古今に空き 義は中外に亘る 公の施すは天の以くし 我の受くは海の以くす
我が志未だ成らざるに 公我を待たず 悠悠たるや此の心 其れ億萬載

戊午春

(大正七年(一九一八)

越南光復会同人謹んで誌す

大杉旭嶺鐫る



帝国大学医科大学時代の集合写真。3列目右端が佐喜太郎か。



佐喜太郎古写真(新出／個人蔵)
写真台紙の下部に「S.ENDO/OISO.SAGAMI/
遠藤信行／大磯南本店」とある。

浅羽佐喜太郎公碑 建立100年特別展

主催 袋井市歴史資料館(歴史文化館・郷土資料館・近藤記念館)

共催 浅羽佐喜太郎公碑建立100周年記念事業実行委員会

開催期間 平成30年7月3日㊥～11月30日㊤

会場 袋井市近藤記念館(袋井市浅名1021番地／袋井市郷土資料館に併設)

参考図書 潘佩珠著、長岡新次郎・川本邦衛編『ヴェトナム亡国史他』(東洋文庫73、平凡社、1966年)。
(発行年順) 岡倉古志郎(代表)『東遊(ドンズー)運動以後の日本とベトナムの関係——アジアの民族運動との関係において』(昭和56年度科学研究費補助金研究成果報告書、1982年)。
柴田静夫『浅羽佐喜太郎公』(自筆ノート、1984年頃、個人蔵)。
富田春生『墓と記念碑——東遊運動が遺したもの——』(『南方文化』第12輯、天理南方文化研究会、1985年)。
桃木至朗『歴史世界としての東南アジア』(山川出版社、1996年)。
内海三八郎著、千島英一・桜井良樹編『ヴェトナム独立運動家 潘佩珠伝 日本・中国を駆け抜けた革命家の生涯』(芙蓉書房出版、1999年)。
浅羽町史編さん委員会編『浅羽町史 通史編』(浅羽町、2000年)。
柴田静夫『報恩の碑——義侠の医師浅羽佐喜太郎と潘佩珠』(青柿堂、2009年)。
ジェン・グリーン著、ピーター・ジノマン／ハイ・V・ルオン監修『ナショナルジオグラフィック 世界の国 ベトナム』(ほるぷ出版、2009年)。
今井昭夫・岩井美佐紀編著『エリア・スタディーズ39 現代ベトナムを知るための60章【第2版】』(明石書店、2012年、初版2004年)。

袋井市歴史文化館

編集・発行

〒437-1192 静岡県袋井市浅名1028番地(浅羽支所2階) TEL.0538-23-9269 ホームページ <http://fukuroi-rekishi.com>

大正7年(1918)3月、ベトナムの独立運動を指導したファン・ボイ・チャウ潘佩珠は、東浅羽村の人々と協力して、梅山の常林寺に、浅羽佐喜太郎への恩義を込めた石碑を建立しました。

かつて、小田原で開業医をしていた浅羽佐喜太郎は、東京で活動していた潘佩珠たちを支援しました。1907年の日仏協約により、潘佩珠たちは国外退去を余儀なくされましたが、彼らは、その時の恩義を返すために、10年後に再度日本に上陸したのです。今年は、「浅羽佐喜太郎公記念碑」が建立されてから、ちょうど100年目に当たります。この節目の年を記念して、浅羽佐喜太郎と潘佩珠の特別展を開催します。

「報恩の碑」を歴史の舞台に載せた人々

うつ み さん ばち ろう内海三八郎と柴田静夫　石碑建立から50年

浅羽佐喜太郎を広く紹介した郷土史家の柴田静夫は、「浅羽佐喜太郎公記念碑」のことを「報恩の碑」と呼んだ。最初はこの「報恩の碑」を取り上げたのは、昭和17年(1942)5月ころのものと考えられる、とある新聞記事「報恩秘話　遙けく安南から一熱血の志士送金―」とみられる。残念ながら、この新聞名と掲載年月日はいまだに判明していない。その後、「報恩の碑」の存在は長年忘れられていた。再び注目されるのは、昭和43年(1968)1月23日の、内海三八郎の浅羽町「報恩の碑」探索であった。内海は最初、浅羽町役場を訪問し、庁舎中の職員に確認してもらうが、誰も聞いたことすらなかった。そこで、当時浅羽中学校の社会科教師であった柴田静夫を紹介される。柴田は内海の話の間くうちに、浅羽中学校が創立されて(1947年)間もないころ、近所の人に「梅山の常林寺に、インド人だか、アンナン人だかの遺跡があるというが知っているかね」と聞かれたことを思い出す。二人は常林寺境内に向かい、そこで「浅羽佐喜太郎公記念碑」と刻まれた巨大な石碑を確認する。内海は石碑の前で、潘佩珠の激烈な生涯のこと、浅羽佐喜太郎との関わりの話を長時間にわたり語った。そして、最後に浅羽家への訪問を果たす。奇しくもそれは、「報恩の碑」建立から、ちょうど50年目のことだった。

マスコミに取り上げられ、やがて『磐南文化』創刊号への掲載へ

昭和48年(1973)11月3日に、NHKラジオの国際放送として、ベトナム語「東京だより―二つの墓誌―」と題する内容が東南アジアに向けて放送された(担当　富田春生)。二つの墓誌とは、ドンズー東遊運動の留学生で、1908年に自殺した陳東風と、チンドンフォン1910年に43歳で亡くなった浅羽佐喜太郎のことである。昭和51年(1976)6月24日・25日の二日間、『静岡新聞』磐南特集号の中で「浅羽町」が取り上げられ、その中の「浅羽の人物」を柴田が担当。8名を選び執筆した。このうち一名が佐喜太郎の父、浅羽義樹、もう一名が浅羽佐喜太郎であった。この記事により、地域の人々に、浅羽佐喜太郎の存在が知られるようになる。昭和52年(1977)柴田は、これまでの調査と浅羽家に伝えられてきた「秘話」を基にして、『磐南文化』創刊号に、「ベトナム独立運動の亡命者を助けた浅羽佐喜太郎」と題する短文を執筆し掲載する。これが、浅羽佐喜太郎の存在を世に出す起点となった。

内海三八郎 (1891年～1986年)

横浜生まれ。東京外国語学校卒業後、戦前は商社員、後に外務省嘱託としてエジプトやフランス領インドシナに駐在。戦後もベトナムに残り、貿易商として1963年(昭和38)まで滞越した。戦前からの、日本では数少ないベトナム通であった。内海はベトナムでの生活に慣れるにしたがい、建国の英雄と慕われている潘佩珠に強い関心を持ち、軟禁状態となっていた潘の自宅に伺い面会を求めたこともある(同志以外には会いたくないと断られた)。恐らく日本人として初めて潘の書き残した「自判」の漢文原文を手に入れ、その訳を試みた人物。内海が浅羽町を訪れた1968年(77歳)は、潘佩珠の伝記執筆の真最中であったが、高齢のため、清書が完成したのは1984年(昭和59)のことであった。

柴田静夫 (1919年～2009年)

袋井市松原生まれ。長年教職にあり、退職後は浅羽町史編纂室の嘱託として『浅羽町史』本編の編集と、資料集の編纂にあたった。昭和43年の内海による記念碑探索時に常林寺へ案内してからは、浅羽佐喜太郎と潘佩珠の研究をライフワークとして取り組み、多くの研究者の仲介を行った。



NHK国際放送「ベトナム語放送開局45周年記念特別番組」の取材を受ける柴田静夫
2001年4月2日放送



『磐南文化』創刊号
柴田の文章は2ページ余り(2800字)の短文であったが、佐喜太郎研究の起点となった

科学研究費補助金研究「東遊運動以後の日本とベトナムの関係」の研究グループとその成果

世に知られる存在となってきた「報恩の碑」と浅羽佐喜太郎の存在を学問の俎上に載せ、世界に向けて発信したのが、昭和54年から56年(1979～1981)の三ヶ年にわたり、当時の新進気鋭の研究者14名による研究チームが、文部省の科学研究費補助金(総額500万円)を受けて行なった総合研究であった(研究代表者:岡倉古志郎〈当時中央大学商学部教授〉)。

この研究の事務局を務めた立教大学の後藤均平教授は、柴田静夫が『磐南文化』に執筆した文章を偶然目にしたことから、浅羽佐喜太郎が静岡県磐田郡浅羽町の人であり、潘が建てた記念碑が梅山常林寺にあることを知る。そして昭和55年(1980)3月26日、柴田の仲介で浅羽町を調査団が訪問することとなり、関連調査はその後、計5回行われた。

この総合研究における最大の成果と評価されたのが、

- ①浅羽佐喜太郎の記念碑の存在と、その内容が解明されたこと、
- ②神奈川県小田原市前羽の浅羽医院の調査、の2点であった。

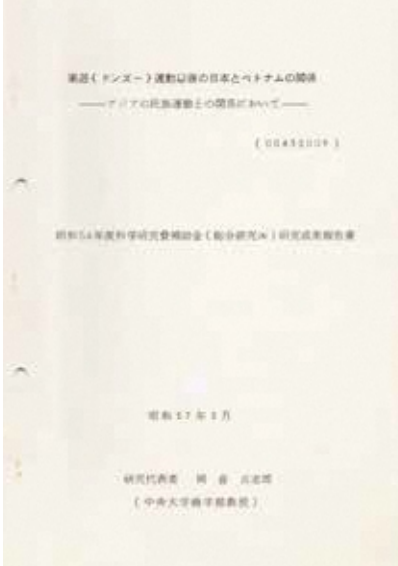
総合調査がもたらしたもの

総合調査により、日本国内に所在する潘佩珠の東遊運動に関する基礎資料が網羅されることになる。特に現在知られている浅羽佐喜太郎と報恩の碑の関連資料のほとんどは、この調査時に発見され確認されたものであり、佐喜太郎の孫にあたる浅羽和子氏からは、浅羽家に伝えられた秘話の聞き取り調査も実施された。

特に事務局を務めた後藤均平は、その後も積極的に新聞や雑誌を通じて広く浅羽佐喜太郎の業績を紹介したので、日本における潘佩珠の東遊運動のこと、浅羽佐喜太郎の事蹟は、国内はもとより、世界に広く知られることになり、ベトナム政府による潘佩珠の東遊運動の再評価へとつながるものとなった。

科学研究費補助金研究成果報告書

3年に及ぶ総合研究により、学術基礎が固められた。



常林寺に総合調査で訪れた調査団。後列左から五人目が後藤均平教授。



後藤均平 (1926年～1998年)

大分市生まれ。東京大学文学部東洋史学科卒。昭和47年(1972)からは立教大学文学部教授となる。専門は中国古代史、ベトナム史。昭和55年(1980)3月26日に初めて浅羽町の調査に訪れ、それ以後、たびたび訪問した。1979～1981年の科学研究費補助金研究では、潘佩珠に関する調査研究を担当し、その後の世界的な研究の基礎を築いた。

年　　譜
1941～42年(昭和16～17) 新聞記事の「報恩秘話」。 初めて報恩の碑がマスコミに取り上げられる。 しかしこのあと、長年にわたり碑のことは忘れられることになる。
1966年(昭和41) 潘佩珠著、長岡新次郎・川本邦衛編『東洋文庫73　ヴェトナム亡国史他』(平凡社)が出版される。「 ヴェトナム亡国史 」他3点という 潘佩珠の著作が初めて日本語に翻訳出版される 。これにより、 日本での本格的な潘佩珠研究が始まる。
1968年(昭和43) 内海三八郎が浅羽町を訪問。1月23日、柴田静夫に紹介され、梅山常林寺で潘佩珠の自伝『自判』に記載された「浅羽佐喜太郎公記念碑」を確認し、浅羽家を訪問。
1973年(昭和48) 11月3日、NHK国際放送で、「二つの墓碑(陳東風、浅羽佐喜太郎)」がベトナム語で東南アジアに向けて放送される。
1976年(昭和51) 6月24・25日 二日にわたり『静岡新聞』が磐南特集号を組み、その中の「浅羽の人物」で柴田静夫が浅羽義樹と佐喜太郎を取り上げる。 これにより、父義樹と佐喜太郎のことが地域の人々に知られるようになる。
1977年(昭和52) 柴田静夫「ベトナム独立運動の亡命者を助けた浅羽佐喜太郎」が『磐南文化』創刊号に掲載される。 浅羽佐喜太郎と記念碑についての初の本格的研究であった。
1979年(昭和54) 文部省科学研究費補助金研究「東遊運動以後の日本とベトナムの関係」が始まる(～1981年) この調査以後多くの研究者が、梅山常林寺の浅羽家墓地と記念碑を訪ねるようになる。
1983年(昭和58) 日越学術交流(第1回)の日本政府招聘歴史学者として、社会科学委員歴史学院長の阮文造(グエン・ヴァン・タオ)氏が慶応大学に3カ月間在籍。阮氏はこの年の7月19日に調査のため来袋。 ベトナムの研究者として初の訪問。これ以後ベトナムで浅羽佐喜太郎と報恩の碑の存在が知られるようになる。

浅羽義樹と佐喜太郎

梅田村浅羽家

浅野佐喜太郎が生まれた梅田村(袋井市梅山)の浅野家は、浅野地区では最も格式が高い梅田村八幡宮(現在の梅山八幡神社)の宮司を世襲し、神祇管領を務める京都吉田家から神主としての許状を受ける家柄であった。佐喜太郎の父、義樹は11代目にあたる。



浅羽義樹 (1835年~1912年)



義樹は天保6年(1835)に豊田郡中島村(旧竜洋町中島)茂野庄助の次男として生まれ、文久3年(1863)2月に、浅羽帯刀(故人)の長女うたの婿として浅羽家に迎えられ、8月に家督を相続し八幡宮司となり、大久保忠尚について国学を学んだ。

慶応3年(1867)3月1日、32歳の時、浅野家にとって待望の長男、佐喜太郎が生まれる。同年10月に大政奉還、12月には王政復古の号令が発せられ、この年を境に義樹の運命は大きく動き出す。翌明治元年(1868)4月に遠州報国隊に参加して、あじむり有栖川宮熾仁親王を警護して江戸城に入城、11月に凱旋した。報国隊解散後、東京に移住し、のち軍務官、兵部省に勤務した。

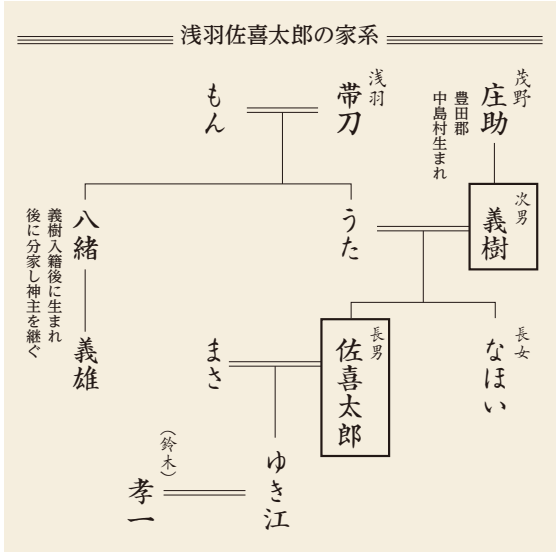


浅羽佐喜太郎 (1867年~1910年)



慶応3年(1867)、義樹の長男として生まれ、姉との二人姉弟であった。8歳まで梅山の祖母の家で過ごし、以後、父の住む東京へ出た。明治23年(1890)に東京第一高等学校、明治27年(1894)に帝国大学医科大学(東京大学医学部の前身)を卒業した。ドイツ留学を志していたが、健康がすぐれないために諦めて開業医となり、神奈川県前羽村町屋(小田原市)に浅羽医院を開業した。

明治34年(1901)、佐喜太郎34歳の時に初倉村(島田市)の大塚まさと結婚。翌年には、長女ゆき江が誕生し、平穏な日々を過ごしていた。



遠州報国隊

遠州報国隊は、徳川幕府を倒すために、官軍（総督・有栖川宮城仁親王）に同行・協力した有志隊である。遠州地方は、杉浦頭取や加茂真彌などのすぐれた国学者を多く輩出して、遠州報国隊は、そのような文化的背景のもと、神祇を中心とし、尊王思想を掲げて結成された。天竜川を挟んで、西側を西国隊、東側を川東隊とし、総勢306名。義経は川東隊に所属しており、出征部隊87名の内に、遠まれば江戸に在り、重要地点の守衛に従事した。

明治元年（1868）11月4日に帰国命令が出されたが、隊員の中には、そのまま東京に残り、明治政府の中で活躍する者もいた。

浅羽義樹・浅羽佐喜太郎 年譜			
年月日	義樹年齢	佐喜太郎年齢	出 来 事
天保 6年(1835) 1月10日	0		義樹(旧姓茂野)・豊田郡中島村に生れる。 学を好み、師について漢学を学ぶ。
文久 3年(1863) 2月 2日	28		義樹、浅羽家に入籍(8月10日に相続)。 大久保忠尚について国学を学ぶ。
元治 元年(1864) 1月29日	29		長女なほい生れる。
慶応 3年(1867) 3月 1日	32	0	長男佐喜太郎生れる。
慶応 3年(1867)10月14日	32	0	大政奉還。
慶応 3年(1867)12月 9日	32	0	王政復古。
明治 元年(1868) 4月 2日	33	1	義樹、遠州報国隊に参加。 報国隊の一員として、江戸の警衛に従事。
明治 元年(1868)11月	33	1	遠州報国隊、京都に凱旋。 義樹、軍務官書記に補せらる。
明治 元年(1868)	33	1	義樹、この年より東京に住む。
明治 4年(1871) 8月	36	4	義樹、兵部省會計少令使となる。
明治 6年(1873) 8月	38	6	義樹、兵部省會計軍吏補(少尉)となる。
明治 7年(1874) 4月	39	7	義樹、兵部省會計軍吏副(中尉)となる。
明治 8年(1875) 4月	40	8	義樹、従七位に叙せらる。
明治 8年(1875)	40	8	佐喜太郎、この年まで梅山の祖母のもとで過ごす、 以後は父の住む東京で暮らす。
明治10年(1877) 5月	42	10	義樹、西南戦争に従軍。征討軍団付。
明治10年(1877)12月	42	10	義樹、凱旋す。
明治11年(1878)11月22日	43	11	義樹、勲六等単光旭日章、金500円を賜る。
明治12年(1879) 4月 8日	44	12	義樹、陸軍會計軍吏(大尉)となる。
明治13年(1880) 1月20日	45	12	義樹、正七位に叙せらる。
明治18年(1885) 4月 7日	50	18	義樹、勲五等雙光旭日章を賜る。
明治22年(1889) 3月19日	54	22	義樹、憲法発布記念章を賜る。
明治22年(1889) 5月14日	54	22	義樹、従六位に叙せらる。
明治22年(1889) 6月17日	54	22	義樹、後備役となる。
明治22年(1889) 7月17日	54	22	義樹、退役す。恩給年金335円。
明治23年(1890) 6月13日	55	23	義樹、陸軍會計沿革取調嘱託となる。
明治23年(1890) 7月 8日	55	23	佐喜太郎、第一高等中学校卒業。
明治23年(1890)10月	55	23	義樹、陸軍沿革論編纂。
明治26年(1893)	58	26	義樹、東京株式会社芝銀行専務取締役となる。
明治27年(1894) 7月	59	27	義樹、召集さる。宇品兵站兼碇泊司令部付となる。
明治27年(1894)12月24日	59	27	佐喜太郎、帝国大学医科大学(現東京大学医学部)卒業。 その後、小田原市で浅羽医院を開業。
明治28年(1895)10月	60	28	義樹、召集解除さる。
明治28年(1895)11月28日	60	28	義樹、勲四等瑞宝章、賜金300円、従軍記章を賜る。
明治29年(1896)10月31日	61	29	義樹、恩給年金345円となる。
明治34年(1901) 1月28日	66	33	佐喜太郎、大塚まさ(17歳)と結婚。
明治35年(1902) 1月15日	67	34	佐喜太郎長女ゆき江生れる。
明治37年(1904)	69	36	日露戦争。
明治42年(1909)12月29日	74	42	佐喜太郎の妻まさ死去(25歳)。
明治43年(1910) 8月	75	43	東浅羽村大洪水。
明治43年(1910) 9月25日	75	43	佐喜太郎死去(43歳)。
明治43年(1910)11月21日	75		佐喜太郎葬式につき、梅山各戸に心付。
明治44年(1911) 2月15日	76		義樹、八幡宮へ370円寄付。
明治44年(1911) 5月	76		義樹、愛宕町所有地を小学校建設地に譲与。 東京市より金盃を贈られる。
明治45年(1912) 3月 7日	77		義樹死去(77歳)。東京森山墓地に葬られる。

ファン・ボイ・チャウ ドンズー

潘佩珠の東遊運動と浅羽佐喜太郎

1860年代以降、フランスはベトナムを侵略しはじめた。1890年代には東南アジアの東側を支配下に治め、フランス領インドシナ連邦と呼ばれる植民地をつくりあげた。この時代のベトナム人は王政と搾取に苦しみ、全土に民族意識の高まりと反乱が頻発したもの、近代兵器を持つフランス軍には歯が立たず、活動家は逮捕され処刑された。

このようななか、1904～5年(明治37～38)に行われた日露戦争での日本の勝利は、ベトナム人を大いに奮起させ、日本への期待がにわかに高まっていた。

1905年4月、ベトナム独立運動の指導者潘佩珠ほか2名は日本政府に抗仏独立運動の軍事協力を求めるために入国した。しかし中国から亡命していた梁啓超との会談で、運動の主力を子弟教育に方向転換することを決意した。留学生の数は1908年前半には最盛期を迎え250名を越えた。これが「東遊運動」である。さらに勤王家の潘は、王族を運動の領袖に据えるために、王位継承権を持つ緞外侯璽柢の来日を1906年(明治39年)4月に実現させた。

フランスは東遊運動の活動に神経をとがらせ、彊樞の来日と共に留学生の数が増すと、日本政府へ取締りを要求したが、日本政府は本腰を入れなかった。この間、フランス植民地政府は留学生の留守家族を逮捕し、送金を停止させるなどの対抗措置をとった。

1907年6月に日仏協約、仏領インドシナに関する日仏宣言が調印されると、フランス政府は東遊運動の留学生の処分を日本政府に要求し、その結果1909年1月に潘佩珠、曠柢をはじめとする留学生の国外追放令が出され、わずか4年たらずで、東遊運動は終わりを告げた。

潘佩珠は事後措置と帰国費用の捻出に困り果て、こちら金策に走り廻り、その末に阮泰拔を仲介して、仲間うちで「義侠の人」として知られていた浅羽佐喜太郎にすがることになる。この時の詳細が潘佩珠自筆の『自判』に記載されている(次ページの和訳を参照)。

佐喜太郎は速やかに1,700円もの大金を阮に託したので、これを資金として急場を乗り越えることができた。潘は離日する直前に阮泰拔を伴い国府津の浅羽宅(浅羽医院)を初めて訪問し、夜を徹して酒を酌み交わし、別れを惜しんだのである。

ドンズー
東遊運動

1905年(明治38)4月横浜に着いた潘佩珠は、日本に亡命していた中国の革命家、梁啓超との会談を通じて、日本政府にはベトナムの抗仏独立運動を軍事面で支援するの意意向も無いことを悟る。しかし、教育水準の高い日本に祖国の前途を為すの青年たちを留学させることにより、今後の独立運動の人材を養成することに方向転換する。

梁啓超の仲介で大隈重信、犬養毅の大物政治家、福島安正、根津一、柏原文太郎等の軍人、教育者に会い協力の約束をとりつけている。潘の思いに応えて最盛期の1908年前半には留学生数は250名を越えた。彼らは東京同文書院、武振学校、正則英語学校に入学し、寄宿舎や下宿に分散した。

ファン・ボー・チャウ
その後の潘佩珠(1867年~1940年)

1909年3月に離日した潘佩珠は、その後、香港、バンコク、シンガポール、中国各地を渡りあち、広東で3年間の獄中生活を送った後、1917年密かに日本を訪れ、その後も北京、杭州、広東を往来しながら、数回、日本を訪れている（滯日中の軋軋に会ったためとされる）。1925年7月に上海でフランス官憲に逮捕され、ハノイに移送され、11月に終身懲役の判決を受けるが、反対する民衆の声に押されて釈放され、フエで軟禁生活を送ることとなる。1940年10月29日に75歳で波瀾万丈の生涯を閉じる。



き がい こう コンデ
畿外侯彊祗(左)と
潘佩珠(右)

臣下の潘は彊祗の下に座している。

『自判』序文1925~26年

潘がフランス領インドシナ政府に捕らえられた後、軟禁中の住まいで執筆されたもので、研究者の間では『潘佩珠年表』とも呼ばれている。

浅野佐喜太郎に関する記述がある唯一の史料でもある。



潘佩珠『自判』に記された佐喜太郎との交流

潘がフランス領インドシナ政府に捕えられた後、軟禁中の住まいで執筆した自伝。原文は漢文。

潘が自ら記載した、浅羽佐喜太郎との交流を示す唯一の史料。

（ ）は原文の注、（ ）は訳者の注である。

戊申[明治42年／1908年]の冬10月に、学生会は解散した。公憲会もなくなった。私は、日本を待むことはできないと知った。もっぱら、中華革命や、世界の各民族で、我らベトナムと同様の悩みを持つものを見みとするようになった。	私は困窮の中でこのお金を得た。知己を喜んだ。支援金を得た後、私はすぐにこの支援金を三つに分けた。
〔そのような時に〕私は初めて孫中山氏にお会いすることができた。孫氏は私を涓天宮崎氏に紹介してくれた。涓天は日本の浪人〔非体制派というような意味合い〕にして、全世界の革命思想に精通した人物である。私は初めて涓天氏にお会いしたのであるが、そこで涓天氏は私にこう言った。「貴国の自力では、フランス人を倒すことは絶対にできません。その援助を友邦に求めています。まだ援助はなされていません。そんな中で、日本があなたを厚く援助することはないと思います〔直訳／そんな中で、どうして日本が貴君を厚く援助するのでしょうか?〕。日本の政治家は、大抵は野心に富んていますが、義侠心は貧しいものです。あなたは、青年たちに勧めて、英語・ロシア語・ドイツ語〔俄＝オロシア、徳＝ドイツ〕を学ばせるのがよいでしょう。多く、世界中の人々と交流して、フランスの罪惡を糾弾し、世界中の人々に聞かせるのです。人道を重んじ、強權を重要視しない。世界には、実はこのような人はそれほど少ないのです。それで〔広くフランスの罪惡を主張して〕やっつと、君たちへの支援が始まるのだと思う。	はじめに私に同意してくれたのは章炳麟先生、張繼氏、景梅氏ら9人。次に朝鮮人の趙素昂君（この人はかつてアメリカにいて、阮愛國氏と面識があった）、インド人の帯君とフィリピン人の恒君（この二人はヨーロッパ名を持っていたが、私はメモするのを忘れてしまった）など、同志は数十人。私に同意してくれた。そして、日本の大杉栄、堺利彦、宮崎滔天ら十余人も（大杉、堺の二氏は日本社会党の領袖である）、同情の意を表明してくれた。
私は、その時はまだ、それほど真剣にはこの言葉を信じていなかった。だが、世界中の思想界〔言論界?〕と連絡する利益を知るに至り、すぐに涓天氏の言っていたことを開始した。そんなわけで、欧米に遊学したいと思ったのだが、旅行するお金はないし、なによりヨーロッパの言語ができなかった。恥ずかしながら、私は国際的には、目も見えず、耳も聞こえない男であったのだ。	最も多いのは外交費。次に多いのは印刷費。旅費と居住費はその次だ。私はすぐに中華革命党と日本平民党に走った。
戊申の年10月に東亜同盟会を結成した。我国の人で会員になったのは、潘是漢(私の別名)、鄧子敏、阮琮林等十余人。この会は、東アジア連絡の胚胎のために結成した。この時私は頗る希望を持っていた。	また私は、〔ベトナムと中国とは〕唇と齒の密接な関係だと考えていた。大体中華のごときは、粵・滇・桂と我國は土地が接している〔粵＝広東省、滇＝雲南省、桂＝江西省の一部〕のだ。なので、私は滇・粵出身の在日留學生の間を走り回った。滇桂越連盟会を創ろうと計画していた。雲南学生会長の趙伸君、広西学生会長の曾彦君、皆大賛成してくれた。すぐに桂滇學生の間にも連絡が行き〔この部分、原文に乱れがあるらしい〕、これで、桂滇越連会が成立した。
会の章程〔掟〕によって、会員はすべからく捐助本会金を出さねばならぬ。私は先生からいただいた支援金から出した。250円。全国で活動している人への捐助の義捐金のために供した。これは、支援金を外交に用いる、まさにその時期であった。	余等以國難 扶桑、公哀其志、極於厄、不許所酬、蓋古之奇俠者、今余來、公已逝矣、俯仰回顧、閱其無人、蒼茫海天、此心誰訴、遂勒所感于石、銘曰、豪空古金、義蓋中外、公施以天、我愛以海、我志未成、公不我待、悠悠此心、其億萬載、越南光復會同人勸、
国内で革命の宣伝をするにあたって、私は印刷物に注目した。そこで、以前著した『海外血書』を、石版印刷に出した。三種の言語で印刷した。一つ目は漢文、二つ目は旧体国文〔喃文〕、三つ目は新体国文で、全部で3000冊刷った。『越南史考』はその時まさに編輯中だったので、また追ってすぐに印刷することにした。全部で700余円。	浅羽碑築造の一件は、日本国民がどうい人達であるかを見るに十分な事例であった。併せて以下に記しておく。
また、陳東風が自殺したことにより、『陳東風伝』を編集し、ともに印刷した。すぐに香港に戻り、法の及ばないところで国内〔ベトナム〕に送ろうと計画していた。この時こそ、先生の支援金を用いる時だ。	私は初めて静岡に來た。石碑建立の計画を持っていた。材料費と彫刻費はいくらか、調べてみたら100円であった。しかも、運んで建てる、その工程にもなお100円以上必要だという。私は自分の懐を探ったが、わずか120円しかなかった。今回は無理だろうか。しかし、すでに死者と約束した以上は、必ず実行せねばならぬ。
だが、言わずもがな、敵は強く我は弱い。援護も薄く、私は孤独であった。ある日、書いたものはすべて無駄になってしまった。	そこで、李仲柏君とともに、浅羽村長幸太郎氏の家に参上した。来意を告げ、あわせて浅羽先生が私を援助してくれたことを詳しく述べた。ちなみに、先生は、自分が行ったことを、未だかつて誰かに話したことはなかったらしい。村長は大感動して、私の計画に大賛成してくださった。私に、「速く造りなさい」と促してきたので、私は、お金が足りないのだ、といい、ここに100円あるので、〔頭金として〕村長さんの家で預かってほしい、と願い出た。私はまた中国に戻り、お金を得てから、再度来日して石碑を建てようと思ったのだ。
東亜同盟があったのはわずか数か月。会中の人は皆、英仏からの革命党であったが、朝鮮革命党、日本社会党は、日本政府の深く恨むところであり、英仏政府もまた彼らを恨んでいたことによる。会は、日本警察の厳令によってつい解散に追い込まれた。連会は、日本政府において、満清とフランスに詰問された。日本政府はまた、消滅を強要し、我々を解散させた。我等はすべからく強權世界のなんたるかを知った。正義公理の会は無く、立派にそれを標榜するものもないのだ、と。	村長は私に言った。「君は、我が村人のために紀念碑を造ろうと言う。私には、君の志を達成させる責務があると思う。行って帰ってくるのは、大変な苦勞でしょう?」と。私は大変喜んだ。
ここに至り、私は困窮の境地にあり、切羽詰っていた。そんな中で考えに浮かんだのは、助けを求める、ただその一策であった。しかし、家に行って、お金をください、と言う。容易なことではあるまい。素より知り合いでもなく義侠者でもなければ、あえてこの呼びかけに応えることはないだろう。	村長はまた、私たちを家に泊めてくれた。また金曜日、村長は私を連れて村の小学校を參觀させてくれた。村長は、学生たちに、日曜に、各家の人に言って、みんなで校場〔学校〕に来るように、と言った。村長の訓諭を聴くのだ、と。
ここで私は意を決し、阮君に話を持ちかけてみた。阮君は賛意を示した。私はそこで、一書を認め、阮君に持って行ってもらった。	思うに、日本の地方自治においては、村長は即ち一村行政の首脳人なのである。当日になって、私が村長とともに学校に行ったところ、各家の長が既にみんな集まっていた。
ああ、しかし、まだ何のお返しもできていない阮君がまたお金を求めたとしても、ありえない、厭だと言われることだろうに〔もし今回、潘佩珠ではなく阮泰抜がお金を貸してくださいと言っていたとしても〕、ましてや、かつて会ったこともない者から、「お金を貸してください」と言われたとしたら……。〔お金を貸してくれるなんていう〕こんな夢想は愚かなことだ。	村長は登壇して演説した。初めに、浅羽先生の義侠の話をした。次に私と李仲柏君を村人に紹介してくれた。李仲柏君は我國の人〔ベトナム人〕だが、日本大学工業進士である、と。そして、意を尽くして、次のように言った。「人類を長く存在させるものは、相互の親愛の感情のみである。浅羽君は
あにはからんや、私は手紙を朝に出したのに、返事はその日の夕方に來た。先生は、その返事の中に、早速日本金1700円を入れてくださっていた。手紙が同封されていた。同封されていた手紙に曰く、「今、家の中を捜しまわってみましたが、私の手持ちはわずかにこれだけです。お待ちください。もしもっと必要でしたら、後でまたお金を送ります」。早速に返ってきた書簡は、ただこのような数句のみであった。一切偉そうな言葉はなかった。	その後10日ほどで、碑が出来上がった。碑高4尺半（西洋の尺）、天然石使用。厚さ5寸。横2尺（西洋の尺）。字は小児の掌ほど。完成した日、村人が集まって完成式典を挙行了た。寄付者にお酒が振る舞われた。みな村長の計画だ。私はわずか100円を出したのみ。私は、このことを同胞に伝えた。この義を知ってもらうには、以上のみで十分だろう。
（原文は「潘佩珠伝」所収／現代語訳：袋井市歴史文化館）	（ ）は原文の注、（ ）は訳者の注である。
アルバムに貼られている集合写真。写真の下に「安南人潘是漢」と書かれている。（個人蔵）	

潘佩珠『自判』に記された、「浅羽佐喜太郎公紀念碑」建立の経緯

潘佩珠は、大正7年（1918）に、再度日本を訪れる。かつて窮地を救ってくれた、浅羽佐喜太郎の恩に報いるためであった。しかし、その時すでに佐喜太郎は亡くなっていた。

潘佩珠は紀念碑建立を思い立ち、佐喜太郎の故郷、東浅羽村の人々と協力して「浅羽佐喜太郎公紀念碑」を建立した。ちなみに、現在の日本のように、「記念」という書き方に固定される前は、「記念」という字と「紀念」という字はどちらも広く通用されていた。現在でも中国語では「紀念」を用いている。佐喜太郎の紀念碑には「紀」という字が使われているが、それはベトナム人で漢文に造詣の深い潘佩珠の文字の選び方を反映したためである。

潘佩珠『自判』には、前頁に訳出した部分に続けて、石碑建立の経緯が、日本人の義侠心を伝える事例として書かれている。

石碑建立の経緯が書かれた唯一の史料である。なお、潘佩珠の原文には、人名、地名などに一部誤りがある。

（ ）は原文の注、（ ）は訳者の注である。

私は先生と別れ、中国に渡った。その後十年経ち、私は再度日本を訪れた。しかし、先生は既にこの世を去っていた。私は深く大恩を感じているが、いまだそれを返せていない。私はこの知己に感謝することができぬことを恥じた。そこで、先生の紀念碑を築造することにした。墓前に石碑を建て、文を彫り込む。こんな内容だ。	義侠の心を以て他国の人を援助した。我が村に住む人々にとって、彼の業績は名誉である。我が村人で、ただ彼一人がこのような君子であろうか？ 今、潘さん、李さんの二人が、風や波を越えて、万里の海を越えて、こんな田舎の我が村に来てくださったのだ。浅羽君の石碑を建てるために、だ。彼等が、我が村人に対していかに真摯であることか。我らは彼等に対し、何も援助しないでいられるだろうか。諸君、恥ずかしくはないのか。〔援助しないのは〕村人の恥ではないのか。また、日本国民の恥ではないのか。このように語るに至って、万雷の拍手が起こった。衆中一人が立って言った。「私たちは田舎者ですから、ただ村長の言う通りにいたします」（この村は農村である、ただ、武人と農戸文士は甚だ少ない）。村長はまた言った。「私は、この紀念碑建立が成功することを願っている。彼等が石を買う費用と、人件費と、運送建築の諸工程にかかる費用を、我が村人が援助する義務があると思う。犠牲、勞力を払ってお金を出して、この一義侠の紀念物を完成させよう。日本国民にとっての天職だ」。話が終る前に、大歓声が建物を揺らした。
浅羽碑築造の一件は、日本国民がどうい人達であるかを見るに十分な事例であった。併せて以下に記しておく。	その後10日ほどで、碑が出来上がった。碑高4尺半（西洋の尺）、天然石使用。厚さ5寸。横2尺（西洋の尺）。字は小児の掌ほど。完成した日、村人が集まって完成式典を挙行了た。寄付者にお酒が振る舞われた。みな村長の計画だ。私はわずか100円を出したのみ。私は、このことを同胞に伝えた。この義を知ってもらうには、以上のみで十分だろう。
私は初めて静岡に來た。石碑建立の計画を持っていた。材料費と彫刻費はいくらか、調べてみたら100円であった。しかも、運んで建てる、その工程にもなお100円以上必要だという。私は自分の懐を探ったが、わずか120円しかなかった。今回は無理だろうか。しかし、すでに死者と約束した以上は、必ず実行せねばならぬ。	（原文は「潘佩珠伝」所収／現代語訳：袋井市歴史文化館）
そこで、李仲柏君とともに、浅羽村長幸太郎氏の家に参上した。来意を告げ、あわせて浅羽先生が私を援助してくれたことを詳しく述べた。ちなみに、先生は、自分が行ったことを、未だかつて誰かに話したことはなかったらしい。村長は大感動して、私の計画に大賛成してくださった。私に、「速く造りなさい」と促してきたので、私は、お金が足りないのだ、といい、ここに100円あるので、〔頭金として〕村長さんの家で預かってほしい、と願い出た。私はまた中国に戻り、お金を得てから、再度来日して石碑を建てようと思ったのだ。	アルバムに貼られている集合写真。写真の下に「安南人潘是漢」と書かれている。（個人蔵）
村長は私に言った。「君は、我が村人のために紀念碑を造ろうと言う。私には、君の志を達成させる責務があると思う。行って帰ってくるのは、大変な苦勞でしょう?」と。私は大変喜んだ。	

（原文は「潘佩珠伝」所収／現代語訳：袋井市歴史文化館）